Bulletin of the Faculty of of Regional Development,
Prefectural University of Hiroshima
2022 No. 1 pp. 171 - 183

ボリビア多民族国サンフアン移住地におけるカトリック教会の創成と発展(2)
－太郎神父，次郎神父，２人の信徒の活動を中心に－

小　川　俊　輔[1]

On the Creation and Development of a Catholic Community in Japanese Settlement Named San Juan of Bolivia, Vol. 2
:Focusing on the Activities by Father Taro, Father Jiro, Yozo AKASHIMA and Sansei NAKAMURA

Shunsuke OGAWA

【要旨】

本論文は，ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地におけるカトリック教会史の叙述を目的とする。小川（2013；2019）も同じ目的で書かれており，本稿はこれに続く３本目の研究論文である。小川（2019）は，より具体的には，サンフアン移住地におけるカトリック共同体の創設から現在にいたるまでの通史の叙述を目的としており，年代順に，特に重要と考えられる出来事，大きな役割を果たした人物の活動について記述している。本論文は，その補遺として位置づけられる。各章の概要は以下のとおり。第１章：本論文の目的，方法，構成，第２章：小川（2013；2019）に登場する太郎神父の生誕からボリビア赴任までの経緯，第３章：太郎神父のボリビアでの活動，次郎神父のボリビア赴任の経緯とボリビアでの活動，第４章：小川（2019）で詳しく取り上げた赤島要蔵さんの生誕からボリビア入植までの経緯，サンフアン移住地およびアルゼンチン転住後の信仰生活，第５章：次郎神父の要請で移住地に入植し，教会だけでなく移住地全体の発展に貢献した中村三省さんの活動，第６章：サンフアン移住地出身のカトリック聖職者一覧，第７章：まとめ。

１．はじめに　－本論文の目的，方法，構成－

南米の内陸国であるボリビア多民族国にサンフアンという名の日本人移住地がある。当地では，1955（昭和30）年の移住地創設以来，潜伏キリシタン・かくれキリシタンの子孫にあたる長崎出身の移住者たちを中心として，敬虔なカトリックの信仰が実践，継承されてきた。小川（2013）が書かれるまで，その信仰生活史について，これを体系的に記録した資料，研究は皆無であった。2012（平成24）年２月，本論文の筆者は，言語接触の実態調査を目的として同移住地を初訪問し

1　県立広島大学地域創生学部地域創生学科地域文化コース

た折，同地におけるカトリック教会史のユニークさに気付き，以降，５度にわたって訪問調査を繰り返し，その成果を２編の学術論文として報告した。

小川（2013）では，①上記の長崎出身のカトリック信者のボリビア移住が，18世紀末期以降に国内外への移住を繰り返してきた潜伏キリシタン・かくれキリシタン・カトリック信者の移住史の延長線上に位置づけられること，②「自由なカトリックの信仰を求める」という宗教上の理由から移住がおこなわれたこと，③ボリビア移住後にカトリックに改宗した人々と比較すると，長崎出身のカトリック信者のカトリック信仰はたいへん強固であったこと，④移住者の中にかくれキリシタンの信仰者が存在したこと，⑤移住地におけるカトリック教会史において，日本から派遣された日本語を話すスペイン人のカトリック司祭及び日本人シスターの多大な貢献があったことについて報告している。

小川（2019）は，サンフアン移住地におけるカトリック共同体の創設から現在にいたるまでの通史の叙述を目的としており，年代順に，特に重要と考えられる出来事，大きな役割を果たした人物の活動について記述している。以下は，その目次である。

1．はじめに
1.1　本稿の目的－先行研究の成果と本稿の位置－
1.2　資料，叙述方法
2．1955年から1960年まで－黎明期
2.1　最初の教会堂が建てられるまで
2.2　高野美喜夫さんの手紙－宣教師の派遣と教理書の寄贈を訴える－
2.3　「太郎神父」の赴任
3．1960年代－発展期
3.1　長崎からの大規模集団移住者の到着
3.2　赤島要蔵さん，畑中鉄巳さん家族の入植
3.3　市街地に教会堂を建立
3.4　大和区（長崎区）の教会と家ミサ
3.5　「太郎神父」の活躍
3.6　赤島要蔵さん，畑中鉄巳さん家族の福音宣教活動，大和区での集団改宗
4．1960年代後半以降－安定期
4.1　巡礼の旅
4.2　倉橋輝信神父のボリビア赴任
4.3　サンフアン出身のカトリック聖職者の誕生など
5．おわりに－本論文の成果と課題

本論文は，小川（2019）の補遺として位置づけられる。構成は以下のとおり。

第２章では，小川（2013；2019）に登場する**太郎神父**の生誕からボリビア赴任までの経緯，第３章では，太郎神父のボリビアでの活動，**次郎神父**のボリビア赴任の経緯とボリビアでの活動，第４章では，小川（2019）で詳しく取り上げた**赤島要蔵さん**の生誕からボリビア入植までの経緯，サンフアン移住地およびアルゼンチン転住後の信仰生活，第５章では，次郎神父の要請で移住地に入植し，カトリック教会だけでなく移住地全体の発展に貢献した**中村三省さん**の活動について，太郎神父の伝記（学界に未報告の新資料），『カトリック移住タイムス』の記事，本論文の筆者による聞き取り調査の結果に基づいて記述する。第６章では，サンフアン移住地出身のカトリック聖職者の名を所属修道会名とともに一覧にして示す。第７章は全体のまとめである。

2．太郎神父　ー生誕からボリビア赴任まで

カトリックサンフアン教会初代主任司祭として移住地の発展に尽くし，移住者に「太郎神父」と呼ばれ親しまれたマヌエル・フェルナンデス・エルチエ（Manuel Fernández Herce）神父については，小川（2013；2019）において，紙幅を割いて記述した。小川（2019）の公刊後，本論文の筆者は，司祭を引退し，穏やかな老後を過ごされている太郎神父をブラジルの南東部に位置するミナスジェライスMinas Gerais州の州都ベロオリゾンテBelo Horizonte（現地の発音ではベロオリゾンチ）の引退聖職者専用グループホームResidência de Saúde e Bem-Estar Irmão Luciano Brandãoに訪ねた。2019（令和元）年９月８日のことである。このとき太郎神父は御年95歳，長い間日本語を使われていなかったこと，また，ご高齢ということもあって，長時間のインタビューはおこなえなかった。しかし，思いがけず，『思い出ーあるひとりのイエズス会宣教師』と題されたポルトガル語で書かれた太郎神父の伝記（Ana Lúcia M.P.F. Silva ed.（2004）*Lembranças... de um Jesuíta missionário*, privately printed）をお借りすることができた（全編写真撮影し，原本返却）。この本は，太郎神父の生涯に興味を持ったAna Lúcia M.P.F. Silvaさんが，太郎神父や神父の周囲の人々への聞き取り調査などに基づいてまとめたものである。伝記には，太郎神父の生誕から司祭引退に至るまでの様々な事績が数多くの写真とともに詳述されている。以下では，小川（2013；2019）において未報告であった太郎神父のボリビア赴任までの生涯について紹介する。

太郎神父は，1924（大正13）年５月13日，スペイン南部アンダルシアAndalucía州コルドバCórdoba県の鉱山の町プエブロヌエボ・デル・テリブルPueblonuevo del Terribleに生まれ，生後まもなくカトリックの洗礼を受ける。２年後の1926（昭和元）年５月10日に弟のホセ･ルイス･フェルナンデス・エルチエ（José Luis Fernández Herce），後の「次郎神父」が生まれる。1941（昭和16）年にイエズス会に入会，引き続きスペイン国内で生活し，海外宣教を志して来日したのは1950（昭和25）年10月，神父26歳のときであった。日本到着後，1952（昭和27）年までの２年間，横須賀にあるイエズス会が運営母体の栄光学園で日本語と日本文化，特に日本人の習慣，礼儀作法，仏教について学ぶ。この２年間について，伝記の中に記されたインタビューでは「母国スペインと日本の言語，文化，その他の相違の大きさに悩み，苦しんだ」と告白している。なお，1952（昭和27）年には，弟の次郎神父も兄と同じ宣教師の道を選び，来日している。

栄光学園での修練の後，1952（昭和27）年から1954（昭和29）年までの２年間，広島市のエリザベト音楽大学で英語，フランス語，スペイン語の教師として奉仕。1953（昭和28）年からの１年間は特に，広島教区内の三篠教区で奉仕。この１年について，「若い人たちと接して良かったです。彼らの心はオープンでした。彼らはクラシック音楽を専攻し，毎日ピアノを学び，音楽史の授業がありました。私は彼らに１年間語学のクラスを教え，この期間中に１～３回コンサートに参加しました。私はヘンデルのミサを覚えています。とても美しいミサ。その間，私は日本語で説教を始めました。とても良い１年を過ごしました！」と回想している。同時に「街には原爆の爪痕が...，大きな木がなくなった...，まだやけどの兆候のある人がいました...」と被爆地・広島の記憶を語ってもいる。

1955年（昭和30年）――サンフアン移住地創設の年――からの４年間，上智大学で神学を学ぶ。司祭に叙階されたのは1957（昭和32）年３月24日，場所は上智大学と同じ敷地内にある聖イグナチオ教会で，叙階式を司式したのは，カトリック東京大司教区の初代日本人大司教であり，1960

(昭和35)年３月28日に教皇ヨハネ23世によって日本人初の枢機卿に親任された土井辰雄師であった。叙階式の翌日（３月25日），初めてミサ聖祭を司式，神父32歳の春のことである。

1958（昭和33）年に上智大学の神学課程を修了した後，広島教区に移る。1959（昭和34）年，イエズス会において司祭叙階の数年後におこなうよう定められた「第３修練」を終え，広島教区内で本格的な宣教司牧活動に入った。

それからまもなくのこと，広島教区にいた太郎神父は，当時のイエズス会日本管区長ペドロ・アルペ（Pedro Arrupe）神父[1]から東京に呼び出された。アルペ神父が口を開く。「座ってください。ボリビアがどこにあるか知っていますか？ 日本語とスペイン語を話せる宣教師が必要です。行きたいですか？」。太郎神父はただ一言「はい」と答え，なぜボリビアなのか，なぜ日本語とスペイン語を話せる宣教師が必要なのかなど，詳しいことは何も聞かなかった。伝記にも，それ以上のことは書かれていない。

ただし，伝記によれば，太郎神父は日本の気候や風習になじめず，困難さや孤独を感じていた。神父がボリビア行きを即決した理由の１つには，環境を変えたいという思いが根底にあったのかもしれない。こうした経緯を経て，太郎神父がボリビアに赴任したのは，神父36歳のときであった[2]。

３．太郎神父と次郎神父

3.1　多忙をきわめる太郎神父

1964（昭和39）年12月10日発行の『カトリック移住タイムス』第25号には，「海外日本人移住地の実態: 主としてカトリック・ミッションの見地よりの視察報告」と題する佐々木鉄治神父（当時カトリック移住協議会の専務理事）による中南米の日本人移住地視察報告が掲載され，その中に「⑺　ボリビアの日系人たち」との一節がある[3]。

> 新移住地の中，サンファンと沖縄第２コロニアは今日まで，フェルナンデス，ヘルチエ師（イエズス会）が担当している。サンフアンには長崎からの所謂「旧信者」40家族ばかり（200名）のカトリックグループがあるが，フ師の努力で移住地の中心に教会堂も建設され，フ師も毎週数日をここで過ごすので他の移住地には見られない程の好条件（精神的に!!）であると思った。フ師はまた沖縄第２の方にも教会を建設し，既に500名以上の受洗者を得ていた同師はここではまた小学校をも主管している。しかしフ師は近くこの沖縄第２をメリノール会に移管するだろうと言われていた。…尚フエルナンデス師はサンタクルス市内のメルチェデ教会（イエズス会担当）に隣接する建物に，女子の宿舎者（ママ）を開き十数名の日系人女子を収容し，市内の各種学校に通う便宜を与えていたが，こう言った寄宿舎に対する要望がしきりであるので近い将来男女各60名ずつを収容し得る本格的な寄宿寮を建設することを望んでいた。

太郎神父の存在と活動を以て「他の移住地には見られない程の好条件（精神的に!!）である」と総括していることが注目されるが，太郎神父の多忙ぶりもまた明らかである。事実，あまりの多忙さに太郎神父は休養が必要な事態に至る。そこで，太郎神父はボリビアでともに働く日本語を話す司祭の派遣をローマと日本のイエズス会本部に要請する。

この要請に応えるかたちでボリビアに赴任したのが太郎神父の実弟ホセ・ルイス・フェルナンデス・エルチエ（José Luis Fernández Herce）神父である。以下では『カトリック移住タイムス』

の記事[4]からホセ神父がボリビアに赴任するまでの経緯をたどろう。

去る6月14日，羽田発の飛行機で年若い一神父が，サンファン移住地（ボリビア国）の日本人移住者援護に挺身する命を受けて勇躍任地へ飛び立っていった。この神父はそれまで六甲（神戸市）教会助任として地域の青少年間に花々しい布教成果をおさめつつあったスペイン出身のヨゼフ・フェルナンデス・エルセ神父（40・イエズス会所属）。

エルセ（弟）神父の今回の任命の直接の動機は，今日まで6年以上もサンファン移住地の教会を司牧しているマヌエル・フェルナンデス・エルセ（兄）神父の切実な救援要請をイエズス会当局が受け入れたことによる。エ（兄）神父の担当地区はあまりにも広く，その環境はあまりにも厳しく，その上活動範囲はあまりに多岐にわたっていたので，もともと一人の司祭にとっては最初から無理な実情であった。同師はサンタクルス市内のイエズス会所属教会（メルセデス）に居住して，そこを根拠に，125㌔も離れたサンファン移住地を毎週訪問する外，沖縄（第2）移住地（約80㌔）をも巡回しなければならぬ。またサンタクルス市内には日本人移住者の子女のために，寄宿舎（女子）をも開設してその世話も引き受けている。

ここで125㌔，あるいは80㌔と言われる距離には“馬も通わぬサンファン”と通称される“悪路”条件を計算に入れなければならない（中略）ある移住事業団担当者はサンファン移住地からサンタクルスの町へ（中略）原始林の中を汗と泥にまみれた3日間の難行軍を報告している（中略）したがって信徒訪問その他の聖務執行は難渋を極める。また政府筋（日本）担当官との問題，移住者の経済的な問題，子弟の教育方針の問題，新興宗教との対決問題等々…。こういった問題に対して一々正面から取り組んで行くために年若い神父が唯一人では何としても無理があるというものだ。事実エ（兄）神父はこの数年特に心身の疲労が目立ち休養を要する状態になっていた。かたがたまた，故国スペインやローマの（イエズス会）本部または日本において新たな，有力な後援者を求めることは現地のミッション活動の継続・強化には必要不可欠のことのように思われる昨今であった。こう言った一連の事情を織り込んだのが，エ（兄）神父の救援要請であった。この要請は程なく上長の認めるところとなり，補佐役の一神父が増派されることとなる（ママ）であるがそれが血を分けた実弟となるとは真に得難いコンビが出来たものだ!!，むろんエ（兄）神父は欣喜雀躍。兄弟神父の間には任命発令と共に，直ちに文通がはげしくなり具体的な計画が進められた。そして二人は先ず故国スペインで落ち合い，必要な打ち合わせを終えて弟神父はサンファンへ直行するであろうが，兄神父は，その後ローマを経て来日し，関係方面とも協議の上で，再びボリビアに帰るというスケジュールが決定し，はじめに述べたようなエ（弟）神父の出発となったのである。われわれはこの計らずも実現した「兄弟神父コンビ」のサンファン移住者援護計画」を喜ぶと共に，全力を挙げてこの困難なミッション援助に奮起する必要を感ずるのである。ここに特に各位のご協力をお願いしておきたい。

ちなみに，エ（弟）神父は1926年スペインに生まれ，1943年イエズス会に入会。1952年来日，東京カトリック大神学院で神学の課程をおえて，1957年，兄神父と共に，東京で叙階され，その後防府，長府（共に広島教区）の教会付を経て，最近は神戸六甲教会（大阪教区）付となっていたものである。

こうして1966（昭和41）年に次郎神父がボリビアに赴任するのだが，紙面に書かれた兄弟神父そろっての宣教司牧は実現せず，体調を崩した太郎神父は次郎神父と入れ替わるようにボリビアを離れ，故国スペインで数ヶ月静養することになった。太郎神父がボリビアを発つ折，6年に及ぶ太郎神父の日本人移住地・移住者に対する貢献を讃え，在ボリビア日本大使館の臼井健大使か

ら感謝状が贈られている。以下は『カトリック移住タイムス』に掲載された記事[5]である。

ボリビア発によると，同国日本人移住地サンファン教会の主任を務める傍ら，同地日本人中学校の校長をも兼任して，移住者の精神的福祉とその子弟の教育に大きな貢献をしつつあったマヌエル・フェルナンデス神父（42）は，最近過労のため健康を害したので，静養のため一時帰日することになった。

フ神父はボリビア赴任前は約７年間滞日，布教に従事していた関係もあり，日本はいわば第２の故郷である（生国はスペイン）

このほど外務省に入った公信によると，同神父の帰日に際し，在ボリビア大使より感謝状が贈呈された。それはサンファン移住地と第２沖縄移住地の教会建設，サンタクルス市内における日本人女子寄宿寮の設置等，この６年間に移住者の教育，福祉に尽すところがじん大なるものがあったからである。

どの記録を見ても，誰に聞いても，太郎神父がサンフアン移住地に大きな貢献をなしたことは一致している（小川，2013；2019）。右に紹介したボリビア大使からの感謝状もそれを物語る事実だが，しかし，そのために，太郎神父は肉体的に大きな犠牲を払うことになったのである。

3.2　次郎神父からの手紙

次郎神父は，体調不良によりボリビアを離れた兄神父の仕事を引き継ぎ，２代目のカトリックサンフアン教会主任司祭を務めながら，多くの役割を担った。次郎神父のボリビア赴任から半年後，カトリック移住協議会は同神父からボリビアでの活動の様子を伝える手紙を受け取っている[6]。

昨日沖縄コロニアに行き，お送り下さいました本の箱２個をたしかに頂きました。こちらの信者には大きな喜びであります（中略）なぜなら私どもはこの本を長い間待っていたからであります。私は神戸を出てもう４ヵ月になりますが，今でも神戸にいたときのこと，神戸の親しい信者さんたちのことを毎日のようになつかしく思い出しています。しかしここにも仕事が多くて，ほとんど暇がありません。私は主任司祭の傍ら，中学校の校長先生をし，また小学校のインスペクトール（視学）もさせられています（中略）。またいろいろな計画を持っています―幼稚園や診療所等の設置もその一つです。

この前教皇庁の大使（大司教様）がこのコロニアをご訪問下さって，大変励まされました。またサンタクルスの県知事も慰問してくれました。

（お序の時に）日本の音楽のレコ（ママ）ドをお送り下さいませんか!!コロニア・サンファンにはほとんどラヂオが聞えませんので，みなは日本のレコードを聞くのを大きな楽しみにしています（下略）（９月28日発）

司牧するサンフアン教会の信者のために，カトリック移住協議会に対して「日本の音楽のレコードを送ってほしい」との依頼をしているところに，「明るい」と移住者に評された次郎神父らしさが現れている。

４．赤島要蔵さんの生涯

太郎神父に協力し，移住地における非カトリック信者のカトリックへの集団改宗に大きな役割を果たした赤島要蔵さん（1918（大正７）年４月生まれ）については，小川（2019：117-119，122-123）に詳しく記したとおりである。本論文の筆者は，2019（令和元）年８月30日から９

月３日までの５日間，アルゼンチン国ラプラタ市のウルキサ移住地に赤島要蔵さんのご長男・赤島献国さん（1944（昭和19）年12月生まれ）を訪ね，献国さんのご自宅に寝泊まりさせていただきながら，赤島家の歴史と赤島要蔵さんの生涯とについてお話しを伺う機会を得た。以下の内容は，赤島献国さんによる証言，教示である。

4.1　赤島要蔵さんの出生からボリビア入植まで

赤島要蔵さんは，父・赤島直右衛門，母・赤島（脇浜）キワの二男として1918（大正７）年に生まれた。神学校在学中に召集され，親類とともに満州へ渡る。神学校で机を並べた畑中鉄巳さんとは戦地でも一緒だった。要蔵さんと鉄巳さんは「兄弟以上の仲」であったという。満州生活は７年に及び，最初の３年は大砲撃ち，後半の４年間は抜擢されて炭鉱の事務職を担った。久賀島の五輪集落出身の五輪トヨさんと結婚。1944（昭和19）年12月，長男の献国さんが生まれる。終戦時，生活していた炭鉱町から大連への最終列車にどうにか乗り込み，大連から船に乗って引き揚げた。命からがらの逃避行であった。

どうにか帰国できたものの，要蔵さんは二男であったために，実家に居場所がない。そこで，現在の五島市岐宿町川原（福江島）の山奥で炭焼きを生業として生活を始めた。その頃赤島家が暮らした土地はいま，大川原ダムの底に沈んでいる。焼いた炭は，飼っていた馬に乗せて三井楽の町に運び，一軒一軒訪問して売り歩いた。また，炭焼きの傍らイカ釣りをして生計の足しにした。

1952（昭和27）年頃，久賀島の村長選挙に，久賀島蕨集落出身のＥ氏が出馬を決める。Ｅ氏は当時，三井楽の警察署長を務めていた。Ｅ氏は，赤島要蔵さんに，久賀島カトリック信者の票集めを依頼する。当選の暁には，要蔵さんを村役場の事務員にする，という約束だった。事前の予想ではＦ氏が優勢だった。しかし，当選したのはＥ氏だった。こうして，要蔵さんは村役場に務めることになり，赤島家は久賀島に転居した。

主な仕事は戸籍係だった。また，月に１～２回発行される『久賀新聞』の編集，執筆を担った。新聞の担当は５～６年に及んだ。要蔵さんの文才，弁舌はＥ氏に高く買われ，村長の挨拶原稿も任されて書いていた。やがてＥ氏は村長に再選された。その折も，要蔵さんは票集めに汗を流した。

妻のトヨさんは，家の周りの段々畑に大麦やサツマイモを植えて育てた。それが赤島家の主食だった。しかし，多いときには７人の子どもがいて，要蔵さんの給料とトヨさんの畑仕事だけでは生活が成り立たない。そこでトヨさんは昼間は農作業をし，早朝夜間に久賀島島内の道路工事の手伝いをして生活費を工面した。苦しく厳しい生活だった。

献国さんが島の小・中学校に通っていた頃，仏教徒の子どものお弁当には米が入っていた。だが，カトリックの子どものお弁当に米はなく，サツマイモと鰯が米代わりだった。教室の外でご飯を食べるときは，一段目に米の子，二段目は麦にふりかけの子，三段目以上にサツマイモの子が座り，弁当をひろげた。しかし，カトリックの子は，弁当を見られるのが恥ずかしいからと，弁当を持ってこないことがほとんどだった。

やがて，長崎県を挙げて南米移住が奨励される。1960（昭和35）年頃のことである。要蔵さんは村の移民係を任され，８ミリビデオを持って久賀島島内の各家庭を回った。しかし，応募者が少ない。それで，知り合いや親戚と一緒に自分が行くことにした。

小川（2019：119）は，赤島要蔵さんと畑中鉄巳さんのふたりはサンフアン移住地における福

音宣教，司牧を志して移住を決めた，と記している（畑中鉄巳さんの次女･美保子さん（1952（昭和27）年10月生まれ）のご教示に基づく）。他方，献国さんは，父・要蔵さんが移住を決めた理由について次のように話された。

まず，満州での７年の平原生活である。久賀島は，平地が少なく，急斜面が海にまで迫った厳しい地形である。満州での生活は，要蔵さんに広い土地，平原への憧れを抱かせた。また，子どもが多く，今のままの生活では，子ども達を高校・大学にやることができない。さらに，朝鮮戦争が起こり，日本にいると再び戦禍に巻き込まれるのではないか，という不安もあった。従軍経験から，もう戦争はこりごりだという思いがあった。以上が，父がボリビア移住を決めた動機であったと，献国さんははっきりと仰り，島の狭い人間関係や決め事に対する嫌悪もあったのかもしれない，と付け加えられた。

4.2　赤島要蔵さんのサンフアン移住地到着後の活動　－赤島献国さんの証言[7]

カトリック信者の人は，太郎神父が移住地に来たことで救われました。スペイン語が分からないときに，日本語を話す神父でしたから。太郎神父は時代に応じて歩むタイプの人間で，日本の神父と違って明るかったですね。赤島家が移住地に到着した頃，太郎神父の本拠地はサンタクルス市にあり，月に１度，120キロ離れたサンフアン移住地を訪問していました。その際，アメリカの難民制度を利用して，各家庭に５～10キロの粉ミルクを配給していましたよ。

父（要蔵さん）が太郎神父の手足となって働くようになったきっかけは，太郎神父の司式で行われた日曜日のミサへの出席だったと思います。父は神学校を出ていたから，太郎神父とは話が合ったんでしょう。弁が立ち，知識も豊富。気に入られたんでしょう。サンフアン入植後，１年くらいすると，父は太郎神父と飛び回るばかりで，仕事はしなくなりました。開墾と畑仕事は母と使用人任せでした。１度，太郎神父が父を伴ってオキナワ移住地に布教活動に出かけたことがあります。２人で各家を訪問して布教して回っていたようで，丸２ヶ月，家に帰ってきませんでした。そのときは，「父は何のために移住してきたのか…」と思いましたよ。本性が表れたんですよ。父はかつて神父になりたいと考えた人でしたから。

幼い頃，ランプを使って神父になるための勉強をしていて，「勿体ない」と祖父に怒られたそうです。父の時代，長崎の田舎では神父を志す人も多かったんです。長崎市の神学校へ進み，パードレ（神父）になる。その目的で入学すれば，寮に住み込みで，お金がなくても面倒を見てくれた。そういう経済的な理由もあって神学校に入った人もいたようです。父は８人きょうだいでした。父は本気で神父を目指して神学校に進み，在学中に召集されました。

4.3　赤島家のアルゼンチンへの転住　－赤島要蔵さんのアルゼンチンでの活動

1961（昭和36）年にサンフアンに入植した赤島さん一家は，1965（昭和40）年には，家族全員，隣国のアルゼンチンへと転住している。それは，

さらなる新天地を求めて，という理由もあったが，決め手となったのは，赤島さんより先にアルゼンチンに移住していたサンフアンからの転住者への霊的指導に対する使命感であった。その頃，赤島さんや畑中さんと同郷（久賀島）で，赤島さんの親戚にあたる宮本勝美神父が，ブラジルに派遣され，福音宣教に従事していた。宮本神父は，赤島さんがアルゼンチンに転住しようとしていることを聞き，アルゼンチンではなくブラジルに転住するよう勧めた。しかし，アルゼンチンに日本人司祭が一人もいない

ことを知った赤島さんは，使命感に燃えて，アルゼンチンで働くことを決めた（小川，2019：122）[8]

のであった。ただし，赤島家のアルゼンチン転住のきっかけは，長男・献国さんの単身でのアルゼンチン移住であった。アルゼンチンの日本人移住地では，当時も，今日においても，花卉栽培が主たる生業となっている。献国さんも，まず，花卉栽培農家の日本人パトロンのもとで働いた。そして，同国における花卉栽培はサンフアン移住地での開拓農業よりも将来性があると考え，サンフアンに残る家族を呼び寄せることにした。こうして赤島家は一家を挙げてアルゼンチンへと転住した。1965（昭和40）年のことである。

はやくも翌1966（昭和41）年６月１日発行の『カトリック移住タイムス』第34号に，赤島要蔵さんのアルゼンチンにおける福音宣教活動に関する記事が掲載されている。

日本人神父が欲しい　赤島氏の驚異的活動を報ずるアルゼンチンの森田氏

アルゼンチン国の首都ブエノスアイレス市で在留日本人カトリック会長として信望を集めている森田択一氏から最近次のような通信があり，在留日本人の間に新興宗教が入りこんで，如何に現地を混乱せしめているか，カトリックの布教には何にが必要なのかなどわれわれを教えるものが中に多いことを示している。

最近当地には日本から新興宗教が入りこんで，しばしば混乱を起しています。創価学会と仏教徒の間でごたごたが絶えない有様で，人々に嫌悪感を与えています。これはカトリックに対しても悪い影響を及ぼしているのですが，そのため私はここに来ました時から，すでに26年間待っているのですが，いまだに日本人のための日本人神父か又は日本語を話す外人神父が一人も来ていただけないので，日本人カトリック信者はまことにわびしい生活をつづけています。この間は日本から，日本語の新旧約聖書，公教要理など沢山書籍を送っていただいて，私達はほんとに旱天の慈雨のように心からうれしい気持でした。感謝しています。そんな処へ今度は大変よろこばしいことが起りました。それは日本人神父のいない当地ですが，突然に長崎県出身の赤島要蔵さんという方が来て下さったのです。この方は神学校に入った人ですが，在学中招集となり復員後，俗人となり４年前に南米ボリビアに移住して来たのですが将来性を考へてアルゼンチンに変られました。この方は３年間ボリビアに居た時は新興宗教を向うに廻して，布教につとめ遂に600名の日本人を正しいカトリックに入信させたという熱意と実行力のある方で，当地でも全面的に私達と協力して下さることを確約されました。そしてカテキストとしての認可もカルヂナル（＝枢機卿－引用者注）によりいただき，４月から５カ所で公教要理の講習会を開き，沢山の志願者を導いて下さっています。そのためにも私達は多くの日本語の本が必要ですので聖書や要理の本などもっと沢山送って下さい。

かつて神父になることを志した赤島要蔵さんのカトリックに対する強固な信仰態度は，生涯不変であった。そして，赤島要蔵さんという一信徒の活動が，南米の日本人移住地のカトリック共同体に大きな影響を与えた，という事実は，特筆すべきものである。管見の及ぶ限り，海外の日本人移住地におけるカトリック共同体の歴史の中で，赤島要蔵さんの活動は唯一無二のものであったと思われる。

５．中村三省さんの貢献

太郎神父の仕事を引き継いだ次郎神父（第３章）にも赤島要蔵さん（第４章）のような協力者が必要だった。しかし，次郎神父がボリビアに赴任したとき，赤島要蔵さん一家は既にアルゼンチンに転住していた。それで，次郎神父は協力者を日本に求めた。この要請に応えて第19次の移住者として1967（昭和42）年にサンフアン移住地に入植したのが中村三省さん（1932（昭和７）年生まれ）である。その経緯を『カトリック移住タイムス』[9]から引用する。

中村三省氏（熊本手取教会）ボリビア・サンファンへ招聘さる

去る３月２日，横浜出帆のアルゼンチナ丸は，珍しく二百数十名の南米移住者で満船となり，渡航者は関係者の盛んな見送りを受けて初春の太平洋へ船出して行ったが，この船にはボリビアのサンフアン移住地の学校指導のために特に現地のホセ・フェルナンデス・エルセ神父の招聘を受けて出発したボニファチオ・中村三省氏の姿も見られた。

中村氏（35）は，法政大学卒業後一旦大蔵省（南九州財務局）に入っていたが，最近は神戸における電気通信関係の会社に勤務していた。ホセ・エルセ神父とは数年前に同氏が神戸海星病院に入院した際に知り合い，ホセ神父がボリビアに赴任するに当って協力を申し出て，今回の招聘が実現したものであるが，現地到着の上はサンファン移住地に常住し，同移住地の小・中学生に対しての，日本語，音楽，体育等の指導を担当し，また傍らホセ神父の補佐役として移住者一般の教化事業にも当ることになるはずである。

この記事の末尾に記されているとおり，中村三省さんは，次郎神父を助けながら移住地における教育分野を中心に活動し，1970（昭和45）年に日本に帰国された。移住地滞在は３年という短い期間であったが，その働きの大きさについて，入植者の石沢（吉永）珠恵さん（1950（昭和25）年６月生まれ）は，「中村先生抜きでは，サンフアンカトリック教会は語れないと思う方です」と話し，次のように証言している。

中村三省先生は，サンフアンにて，サグラードコラソン校の小・中学校の，日本語，体育の先生をされ，学校の通学バスの運転もされていました。スポーツマンで，男子生徒へのサッカーの指導に熱が入っておられました。教会の事務もされ，兎に角，エネルギッシュにお仕事をこなされ，生徒思いの優しい先生でした。運動会が終わったら，不要な材木や，拾ってきた薪を運動場の中央で燃やし，キャンプファイヤーの周りで，生徒に民謡を踊らせて盆踊りを２年程続けましたが，確か，３年目には，幼稚園の母の会の資金カンパの行事として引き継がれました。現在は諸事情で，母の会から，サンフアン日本ボリビア協会へと主催が代わり，今では，ボリビア人も大勢参加してサンフアン祭の大イベントになりました。中村三省先生がサンフアンの盆踊りの元祖と言っても過言ではありません。一度，先生にみんなが盆踊りを楽しんでいるところを見に，参加してほしかったです。

次ページの**写真１**は，サンフアン移住地28km地点に建てられた「大和区（長崎区）の教会」（小川，2019：120-121）を背にして撮られた集合写真である。モタク屋根，壁のない吹きさらしの教会堂とともに，開拓移住初期の困難な日々にあって，明るい笑顔を見せる移住者の表情が印象的である。左端が中村三省氏，その右は次郎神父ではなく，このときたまたま移住地に滞在され

ていた太郎神父。1967（昭和32）年頃。移住地におけるカトリック信仰の一端を生き生きと伝える貴重な写真である。

6．サンフアン移住地出身のカトリック聖職者

サンフアン移住地出身のカトリック聖職者については，小川（2019:124）の遺漏と誤りを正し，所属修道会名を新たに付して，ここに再掲する（敬称略。また，２人の修道女と１人の修道士を輩出した畑中家の方々については，小川（2013：146）を参照）。

川上　清子（1948（昭和23）年生）：お告げのフランシスコ姉妹会
西沢　　学（1951（昭和26）年生）：サレジオ会（司祭）
中村　英子（1953（昭和28）年生）：宮崎カリタス修道女会
障子多美子（1953（昭和28）年生）：Hermanitas de los Ancianos Desamparados
星野美智子（1955（昭和30）年生）：聖体と愛徳のはしため礼拝修道女会
障子ユリ子（1965（昭和40）年生）：Hermanitas de los Ancianos Desamparados
永瀬あゆみ（1976（昭和51）年生）：サレジアン・シスターズ

写真１：サンフアン移住地28km地点の幹線道路沿いに建てられた「大和区（長崎区）の教会」を背にした集合写真，1967（昭和42）年頃，鎌田光恵さん提供

７．おわりに

本論文では，日本語を話すスペイン出身の２人のイエズス会司祭，それぞれの神父に協力した２人の日本人信徒について詳述した。本論文の最大の意義は，信徒の活動という視点から教会史の記述を試みたことにあると考えている。他方，戦後に創設された南米ボリビアの日本人移住地におけるカトリック共同体が記述対象となっていること，また，この移住地が，潜伏キリシタン・かくれキリシタンの子孫にあたる多くのカトリック信者の入植によって形成された点から，本研究の事例研究としての価値が認められよう。

小川（2013；2019）及び本論文によって，サンフアン移住地のカトリック教会史については，その骨格部分が概ね明らかにされたと考えられる。ただし，目立った活動はなくとも，日々，信仰に向き合ってきた個々人の信仰生活史についての記述は十分ではない。これを果たすことが，今後の課題として残されている。

註

⑴　太郎神父にボリビア赴任を打診したアルペ神父は，国内外のカトリック教会において，広く名前の知られた人物である。同神父は1907（明治40）年にスペインで生まれ，長じてイエズス会に入会，1942（昭和17）年から広島のイエズス会長束修練院院長を務めた。医学部卒のアルペ神父は，1945（昭和20）年８月６日，長束修練院において被爆者の救護活動をおこなっている。1958（昭和33）年よりイエズス会日本管区長。1965（昭和40）年にイエズス会総長に選ばれ，病により1983（昭和58）年に辞任するまでその任にあった。1991（平成３）年２月帰天。

2021（令和３）年３月１日から2022（令和４）年２月28日まで，広島市の平和記念公園敷地内に立地する国立広島原爆死没者追悼平和祈念館において，企画展「わが命つきるとも－神父たちのヒロシマと復活への道－」が開催された。この企画展では，自らも被爆したアルペ神父らイエズス会士による被爆者の救護活動，広島の復興期に果たした彼らの貢献が詳しく紹介された。

⑵　小川（2019：121）では，移住者の証言に基づいて「「太郎神父」は，1960年，ボリビアに日本人が居ることを知り，自ら志願してサンフアンに赴任した。」と記した。しかし，神父へのインタビューに基づくこの伝記によれば，「自ら志願して」ということではなかったようである。しかし，移住者が「自ら志願して」と回想，証言したのは，太郎神父の移住地における情熱的な活動，移住地への多大な貢献から，移住者の「太郎神父のボリビア赴任についての記憶」が美化，あるいは創造された，ということではないだろうか。事実とは異なるにせよ，移住者がそのように記憶している，ということ自体に，一定の意味を認めることができる。

⑶　佐々木神父は1963（昭和38）年12月に日本を発ち，ブラジル，ウルグアイ，アルゼンチン，パラグアイ，ボリビア，ペルー，コロンビア，メキシコ，アメリカ本土，ハワイを丸３カ月かけて視察。サンフアン移住地を含むボリビア滞在は３月１日から６日の６日間があてられている（「佐々木神父 中南米の移住地視察の旅に出発 その成果に大きな期待」，『カトリック移住タイムス』第19号，1963（昭和38）年12月31日）。なお，引用文において，漢数字を

算用数字にするなど，内容に影響しない部分について表記を改めたところがある。以下同様。

⑷「注目される南米の新天地ボリビア 聖職者の努力はつゞく　兄弟の司祭が揃って日本人移住者援護の事業に挺身!!　サンファン移住地へ　フェルナンデス・エルセ神父（弟）新たに派遣される」，『カトリック移住タイムス』第35号，1966（昭和41）年８月25日

⑸ マヌエル・フェルナンデス神父一時帰国　ボリビア石（ママ）井大使から感謝状」，『カトリック移住タイムス』第35号，1966（昭和41）年８月25日

⑹「ボリビア便り　レコードがほしい　サンファン移住地から　ホセ・フェルナンデス　エルチエ神父」，『カトリック移住タイムス』第36号，1966（昭和41）年11月５日

⑺ 本節の内容は，赤島献国さんの証言を整理して再構成したものである。

⑻ 引用元の小川（2019）において，引用文中の宮本勝美神父について「フランシスコ会」と書いているが，これは誤りである。宮本神父はフランシスコ会に所属する「修道司祭」ではなく，カトリック大阪教区に所属する「教区司祭」であった。

⑼「中村三省氏（熊本手取教会）ボリビア･サンファンへ招聘さる」，『カトリック移住タイムス』第38号，1967（昭和42）年３月25日

参考文献

Ana Lúcia M.P.F. Silva ed.（2004）*Lembrançãs... de um Jesuíta missionário*, privately printed

小川俊輔（2013）「南米に移住した長崎のキリシタン家族　－ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地の事例－」，『キリスト教史学』67，pp.134-156.

小川俊輔（2019）「ボリビア多民族国サンフアン移住地におけるカトリック教会の創成と発展－南米の日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活－」，『県立広島大学人間文化学部紀要』14，pp.115-129.

参考ウェブページ　＊最終閲覧日：2021（令和３）年10月31日

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館＞主な事業の紹介＞企画展
https://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/project/exhibition/index.html